

(1) 緒言

曲線橋床版に見られるごとく周辺がはりにて弾性支持される扇形平板の力学的特性を解明する為、著者は先に直線ばりあるいは曲りばりにて弾性支持される扇形平板の解法を発表<sup>(1)(2)</sup>し、扇形平板と骨組との間に生ずる力学的相互作用を明らかにしたが、本研究はそれらと応用拡張させ、直線ばりを介して接線方向に連続なる構造形式を有する扇形平板が、連続曲りばりにて弾性支持される場合の解法を提示するものである。解析の手段としては、文献(1)に示されているごとく差分法によって十分満足できる精度の解が得られることが認められたので、本研究においても差分法を適用する。

(2) 解法

本研究において解析の対象とする一方向連続扇形平板は図1のごとく、異なる半径を有する扇形平板が直線ばりを介して接線方向に連続し、内側および外側周弧辺が連続曲りばりにて弾性支持されるもので、直線ばり、曲りばりは共に曲げおよびねじりに対する剛度を有するものとし、曲りばりは支承上において曲げ変形に対してヒンジ、ねじり変形に対して固定の支持状態になっているものとする。

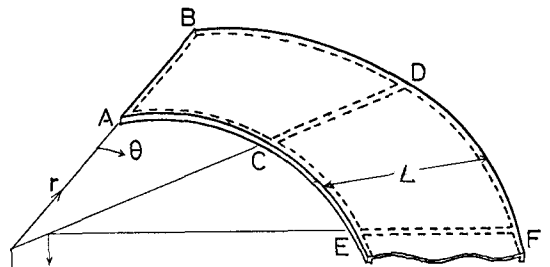


図1 一方向連続扇形平板

1. 基礎微分方程式の差分化

いま各扇形平板を図2に示すごとく放射状格子に分割して格点に番号を付すとき、格点 $(i, j)$ において板の基礎微分方程式を差分化するれば次式を得る。

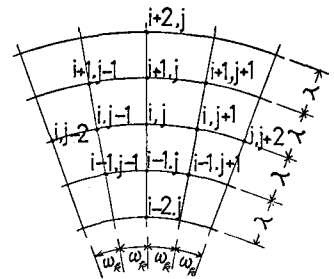
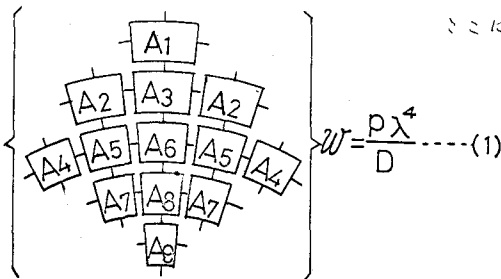


図2 格点番号



$$\begin{aligned} \Delta_1 &= 1 + \lambda / r_{Ri} \\ \Delta_4 &= K_R^4 / r_{Ri}^4 \\ \Delta_7 &= 1 - \lambda / r_{Ri} \\ \Delta_2 &= 2K_R^2(1 - \lambda / 2r_{Ri}) / r_{Ri}^2 \\ \Delta_3 &= -4(1 + \lambda / 2r_{Ri}) - (1 - \lambda / 2r_{Ri})(\lambda^2 + 4K_R^2) / r_{Ri}^2 \\ \Delta_5 &= -4K_R^2 \{ 1 - (\lambda^2 - K_R^2) / r_{Ri}^2 \} / r_{Ri}^2 \\ \Delta_6 &= 2 \{ \delta + (\lambda^2 + 4K_R^2) / r_{Ri}^2 - K_R^2(4\lambda^2 - 3K_R^2) / r_{Ri}^4 \} \end{aligned}$$

$$\Delta_7 = 2K_R^2(1 + \lambda / 2r_{Ri}) / r_{Ri}^2, \quad \Delta_8 = -4(1 - \lambda / 2r_{Ri}) - (1 + \lambda / 2r_{Ri})(\lambda^2 + 4K_R^2) / r_{Ri}^2,$$

$\lambda$ : 半径方向格子間隔,  $\omega_R$ : 板長の接線方向格子間隔,  $K_R = \lambda / \omega_R$ ,  $p$ : 垂直荷重  
 $r_{Ri}$ : 板長の中心Oより格点 $(i, j)$ までの距離,  $D_R = E_p h_p^3 / 12(1 - \nu^2)$ : 板剛度,  $E_p$ : 板のヤング率  
 $h_p$ : 板厚,  $\nu$ : ポアソン比

式(1)を扇形平板のすべての格点においてたて、その際含まれる板外の仮想格点と同数の境界条件

式とを連立させて解けば所要の未知数  $w_{i,j}$  が求まり、得られた結果を板の諸断面力とたわみ  $w$  の関係式に代入することによって、すべての格点における断面力が容易に計算されることになる。

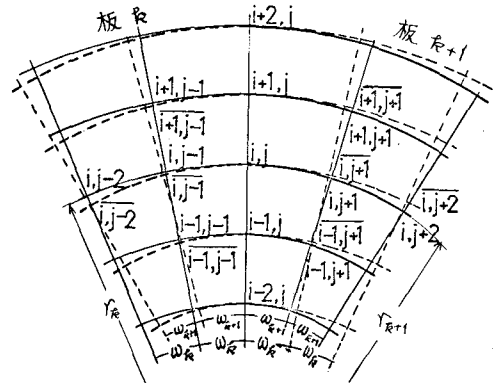


図3 板の接統箇所における格点番号

## 2. 直線辺の境界条件式

半径方向格子間隔入はすべての扇形平板において同一長さを有するものとすれば、扇形平板の接統箇所は一般に図3のごとく表わせる。ここに破線は仮定の板を示し、格点番号上の—は、その格点が仮想格点であることを示す。扇形平板のたわみ面は、接統箇所共通の切線と有するから次式が成立する。

$$\frac{1}{r_R} \left( \frac{\partial w}{\partial \theta} \right)_R = \frac{1}{r_{R+1}} \left( \frac{\partial w}{\partial \theta} \right)_{R+1} \quad \text{----- (2)}$$

上式を格点  $(i, j)$  においてたてた差分式に変換すれば(3)式を得る。

$$w_{i,j+1} - w_{i,j-1} = r_{R,i} \omega_R / r_{R+1,i} \omega_{R+1} (w_{i,j+1} - w_{i,j-1}) \quad \text{----- (3)}$$

次に接統箇所における力の釣合を考えると(図4参照)。

Z軸方向の力の釣合より(4)式、Y軸まわりのモーメントの釣合より(5)式を得る。

$$V_0^R - \vartheta - V_0^{R+1} - dT^{R+1}/dr = 0 \quad \text{----- (4)}$$

$$M_0^R - M_0^{R+1} + dT^{R+1}/dr = 0 \quad \text{----- (5)}$$

ただし、はりの幅  $b^{R+1}$ 、および板とはりの中立軸間距離  $(d-h)/2$  は無視し得るものと仮定している。

$V_0^R, V_0^{R+1}$ ; 板  $R, R+1$  の板反力(単位長さあたり)

$M_0^R, M_0^{R+1}$ ; 板  $R, R+1$  の曲げモーメント(ク)

$\vartheta^{R+1}$ ; はりに作用する単位長さあたり垂直荷重

$F^{R+1}, T^{R+1}$ ; はり  $R+1$  の剪断力およびねじりモーメント

(4), (5) 式を差分式に変換すれば(6)および(7)式を得る。

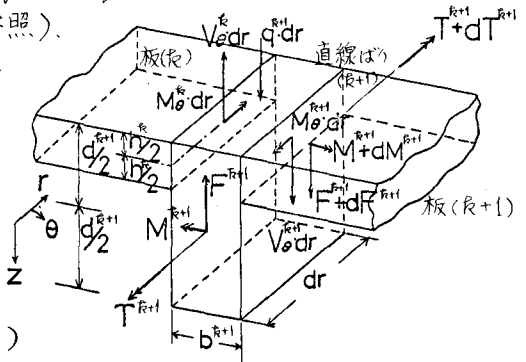
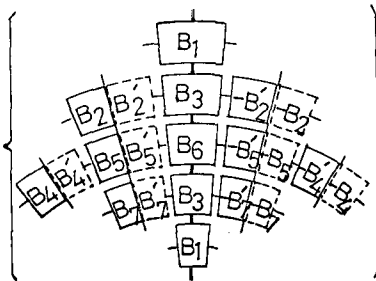


図4 板とはりの接統部における力の釣合



$$w = \frac{q \lambda^3}{D_*} \quad \text{----- (6)}$$

ここに、 $B_1 = H_r^{R+1} m$ ,  $H_r^{R+1} = E_b^{R+1} I_b^{R+1} / D_* m \lambda$

$E_b^{R+1} I_b^{R+1}$ ; 直線はり  $R+1$  の曲げ剛度

$m$ ; 半径方向分割数

$$B_3 = -4 B_1, B_6 = 6 B_1, D_c = D_{R+1} / D_*$$

$$B_4 = K_R^3 / 2 r_{R,i}^3, B_4' = -D_c K_{R+1}^3 / 2 r_{R+1,i}^3$$

$$B_2 = K_R / r_{R,i} \{ (2\nu - 1) \lambda / 4 r_{R,i} + 1 - \nu / 2 \}$$

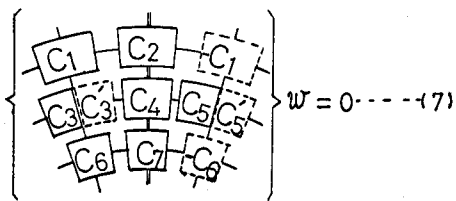
$$B_2' = -D_c K_{R+1} / r_{R+1,i} \{ (2\nu - 1) \lambda / 4 r_{R+1,i} + 1 - \nu / 2 \}$$

$$B_5 = -K_R / r_{R,i} \{ K_R^2 / r_{R,i}^2 + (\nu - 1) \lambda^2 / r_{R,i}^2 + 2 - \nu \}$$

$$B_7 = -K_R / r_{R,i} \{ (2\nu - 1) \lambda / 4 r_{R,i} - 1 + \nu / 2 \}$$

$$B_5' = D_c K_{R+1} / r_{R+1,i} \{ K_{R+1}^2 / r_{R+1,i}^2 + (\nu - 1) \lambda^2 / r_{R+1,i}^2 + 2 - \nu \}$$

$$B_7' = D_c K_{R+1} / r_{R+1,i} \{ (2\nu - 1) \lambda / 4 r_{R+1,i} - 1 + \nu / 2 \}$$



$$C_3 = D_c \cdot K_{R+1}^2 / Y_{R+1,2}^2, \quad C_6 = -Z_r^{R+1} \cdot m \cdot K_R / 2Y_R, \quad C_7 = \nu(D_c - 1) + \lambda(1/Y_{R,i} - D_c/Y_{R+1,i}) / 2$$

$$C_3' = -D_c K_{R+1}^2 / Y_{R+1,2}^2, \quad C_5' = -Z_r^{R+1} \cdot m \cdot K_R / Y_{R,i} - K_R^2 / Y_{R,i}^2$$

ただし、式(6),(7)中において「 $\square$ 」で囲まれた係数は、仮想格点の係数であることを示す。

### 3. 円弧辺の境界条件式

扇形平板(板)の内側円弧辺と曲りばりとの接合部における力のつりあいを考えると(図5参照)、Z軸方向の力のつりあいかた、

$$V_r^R + \bar{q}^R + dF_r^R/ds = 0 \quad \text{---(8)}$$

θ軸まわりのねじりモーメントのつりあより、

$$dT_r^R/ds + M_r^R/R_R - M_r^R = 0 \quad \text{---(9)}$$

曲りばりの中立軸における曲げモーメントのつりあより、

$$dM_r^R/ds - T_r^R/R_R - F^R = 0 \quad \text{---(10)}$$

(8)および(10)式よりF<sup>R</sup>を消去すると、

$$V_r^R + \bar{q}^R + d^2M_r^R/ds^2 - dT_r^R/ds \cdot 1/R_R = 0 \quad \text{---(11)}$$

ここに、 $V_r^R, M_r^R$  ; 板長の反力および曲げモーメント(単位長さあたり)

$\bar{q}^R$  ; 曲りばり長に作用する単位長さあたりの垂直荷重,  $R_R$  ; 曲りばり長の半径

$F_r^R, M_r^R, T_r^R$  ; 曲りばり長の剪断力、曲げモーメント、およびねじりモーメント

さらに曲りばりの断面力 $M_r^R, T_r^R$ と変形量との関係を考慮すれば、(9)式および(11)式は次式のように書きあらわすことができる。

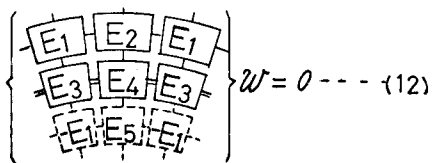
$$\frac{1}{R_R^2} \left( \frac{\bar{E}_b I_b^R}{D_R} + \frac{\bar{G}_b C_b^R}{D_R} \right) \frac{\partial^2 W}{\partial \theta^2} + \frac{1}{R_R} \frac{\bar{E}_b I_b^R}{D_R} \left( \frac{\partial W}{\partial r} \right) - \frac{1}{R_R} \frac{\bar{G}_b C_b^R}{D_R} \frac{\partial^2 W}{\partial r \partial \theta^2} - R_R \left[ \frac{\partial^2 W}{\partial r^2} + \nu \left( \frac{1}{R_R} \frac{\partial W}{\partial r} + \frac{1}{R_R^2} \frac{\partial^2 W}{\partial \theta^2} \right) \right] = 0$$

$$\frac{1}{R_R^4} \frac{\bar{E}_b I_b^R}{D_R} \frac{\partial^2 W}{\partial \theta^2} + \frac{1}{R_R^3} \left( \frac{\bar{E}_b I_b^R}{D_R} + \frac{\bar{G}_b C_b^R}{D_R} \right) \frac{\partial^2 W}{\partial r \partial \theta^2} - \frac{1}{R_R^4} \frac{\bar{G}_b C_b^R}{D_R} \frac{\partial^2 W}{\partial \theta^2}$$

$$+ \left[ \frac{\partial^2 W}{\partial r^2} - \frac{1}{R_R^2} \frac{\partial W}{\partial r} + \frac{1}{R_R} \frac{\partial^2 W}{\partial r^2} - \frac{3-\nu}{R_R^3} \frac{\partial W}{\partial \theta^2} + \frac{2-\nu}{R_R^2} \frac{\partial^2 W}{\partial r \partial \theta^2} \right] = \frac{\bar{q}^R}{D_R}$$

ここに、 $\bar{E}_b I_b^R, \bar{G}_b C_b^R$  ; 曲りばり長の曲げ剛度およびねじり剛度

上の2式を差分式に変換すれば(12)式および(13)式を得る。



$$E_1 = -m Z_0^R / 2\omega_R^2, \quad Z_0^R = \bar{G}_b C_b^R / D_R m \lambda$$

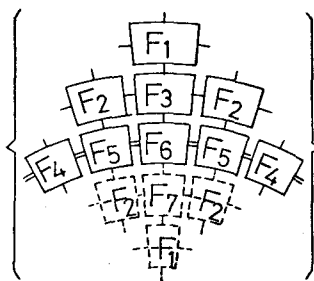
$$E_2 = m H_0^R / 2 + m Z_0^R / \omega_R^2 - R_R^2 / \lambda^2 - \nu R_R / 2\lambda$$

$$H_0^R = \bar{E}_b I_b^R / D_R m \lambda$$

$$E_3 = m \lambda (H_0^R + Z_0^R) / R_R \omega_R^2 - \nu / \omega_R^2$$

$$E_4 = -2m\lambda(H_0^R + Z_0^R)/R_R \omega_R^2 + 2R_R^2/\lambda^2 + 2\nu/\omega_R^2$$

$$E_5 = -mH_0^R/2 - mZ_0^R/\omega_R^2 + \nu R_R/2\lambda - R_R^2/\lambda^2$$



ここに、 $F_1 = 1/2$

$$F_2 = m k_R^2 (H_0^R + Z_0^R) \lambda / 2 R_R^3 + k_R^2 (2 - \nu) / 2 R_R^2$$

$$F_3 = -m (H_0^R + Z_0^R) k_R^2 \lambda / R_R^3 - 1 + \lambda / R_R - \lambda^2 / 2 R_R^2 - (2 - \nu) k_R^2 / R_R^2$$

$$F_4 = m H_0^R k_R^4 / R_R^2$$

$$F_5 = k_R^2 (\nu - 3) \lambda / R_R^3 - m k_R^2 (4 H_0^R k_R^2 + Z_0^R \lambda^2) / R_R^4$$

$$F_6 = 2m k_R^2 (3 H_0^R k_R^2 + Z_0^R \lambda^2) / R_R^4 - 2\lambda \{ R_R^2 - (3 - \nu) k_R^2 \} / R_R^3$$

$$F_7 = m (H_0^R + Z_0^R) k_R^2 \lambda / R_R^3 + 1 + \lambda / R_R + \lambda^2 / 2 R_R^2 + (2 - \nu) k^2 / R_R^2$$

$$W = \frac{q \lambda^3}{D_R} \dots (13)$$

同様の手法により外側円弧辺上における境界条件式も誘導することができるがここでは省略する。

#### 4. 支承における境界条件式

本題における曲りばりは支承上において曲げ変形に対してヒンジ、ねじれ変形に対して固定の支持状態になってゐるものと仮定してゐるので、支承上の格点  $(i, j)$  において  $(M_\theta)_{i,j} = 0$ 、および  $(\partial W / \partial r)_{i,j} = 0$  が成り立たねばならぬ。したがって両式を差分化すれば次の二式を得る。

$$(\nu - \lambda / 2 r_2) W_{2ij} + (\nu + \lambda / 2 r_2) W_{i+1,j} + k^2 / r_2^2 (W_{i,j+1} + W_{i,j-1}) = 0 \dots (14)$$

$$W_{i+1,j} - W_{i-1,j} = 0 \dots (15)$$

なお支承上における支持状態が、点支持であれば  $(M_r)_{i,j} = (M_\theta)_{i,j} = 0$ 、固定であれば、 $(\partial W / \partial r)_{i,j} = (\partial W / \partial \theta)_{i,j} = 0$  が成立するから、これらと差分表示すればそれぞれの支持状態における支承上の境界条件式が得られることになる。

#### 5. 剛比

扇形平板の幅を  $L (= m\lambda)$  (図1参照) とし、 $\alpha_R = L/h_p^R$ 、 $\beta_R = d_R/b_R$ 、 $\gamma_R = b_R/h_p^R$ 、 $\bar{\beta}_R = d_b/b_R$ 、 $\bar{\gamma}_R = b_R/h_p^R$  なる変数を導入するとき、直線ばり、曲りばりの曲げ剛度およびねじり剛度と板の剛度との比、すなわち、 $H_R^R$ 、 $H_0^R$ 、 $Z_R^R$  および  $Z_0^R$  は次のように書きあらわす。

$$H_R^R = \frac{E_b^R I_b^R}{D_R m \lambda} = (1 - \nu^2) \frac{E_b^R \beta_R^3}{E_p^R \alpha_R} \gamma_R^4, \quad H_0^R = \frac{E_b^R I_b^R}{D_R m \lambda} = (1 - \nu^2) \frac{E_b^R \beta_R^3}{E_p^R \alpha_R} \bar{\gamma}_R^4$$

$$Z_R^R = \frac{G_b^R C_b^R}{D_R m \lambda} = \frac{3(1 - \nu) E_b^R}{8 \alpha_R E_p^R} \gamma_R^4 \beta_R \left[ \frac{16}{3} - 3.36 \frac{1}{\beta_R} \left( 1 - \frac{1}{12 \beta_R^*} \right) \right]$$

$$Z_0^R = \frac{G_b^R C_b^R}{D_R m \lambda} = \frac{3(1 - \nu) E_b^R}{8 \alpha_R E_p^R} \bar{\gamma}_R^4 \bar{\beta}_R \left[ \frac{16}{3} - 3.36 \frac{1}{\bar{\beta}_R} \left( 1 - \frac{1}{12 \bar{\beta}_R^*} \right) \right]$$

なお  $C_b^R$ 、 $\bar{C}_b^R$  は R.J. Roark<sup>(3)</sup> の近似式にしてあげた。

したがって変数  $\alpha_R$ 、 $\beta_R$ 、 $\gamma_R$ 、 $\bar{\beta}_R$ 、 $\bar{\gamma}_R$  の値をそれぞれ種々変化させていくことにより、扇形平板と弾性支持ばりとの力学的相互作用が解明できることになる。数値計算例は講演当日発表予定である。

<参考文献> (1) 金子大塚; 直線辺が弾性支持される扇形平板の解法、九大工集、44巻5号、847-1.

(2) 金子大塚; 周辺が弾性支持される扇形平板の解法、土木学会西部支部昭和46年度論文概要集

(3) R.J. Roark; Formulas for Stress and Strain P174 McGraw 1954